

Title	芸術社会学概観
Sub Title	Survey of the sociology of art
Author	山岸, 健(Yamagishi, Takeshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1966
Jtitle	哲學 No.48 (1966. 3) ,p.71- 115
JaLC DOI	
Abstract	<p>I may define the sociology of art as follows : The sociology of art is a science which reveals the social structure, social function, and styles of art in relation to social structure, social change, cultural structure, and cultural change. In a sense the sociology of art which is a branch of the sociology of culture may be the sociology of symbols or the sociology of communication. Sociologists have been slow in recognizing the significance of art as a social phenomenon. The sociological study of art is comparatively new and its achievements are modest but the sociology of art may contribute to the understanding of social structure, social change, cultural structure, and cultural change. For example we can recognize a sociological approach to art in works of H. Taine, E. Grosse, J. M. Guyau, H. Spencer, M. Weber, P. A. Sorokin, T. Parsons, R. Mukerjee, and H. D. Duncan. Art is neither an escape from reality nor a mere play, but is essentially a revealing interpretation of certain aspects of human life and the contemporary social environment. Art is not only a mode of apprehension and communication but also a social product and an established means of social control. Art has both aesthetic and non-aesthetic functions. Future studies in the sociology of art can achieved by an analysis of (1) the social structure of art, for example including the interrelation between the artist and his public; (2) the social function of art ; and (3) the form, motif and theme of art in relation to the social historical setting. We may establish a general theory of the sociology of art through a sociological study of music (the sociology of music), of film art (the sociology of film art), and of architecture (the sociology of architecture) etc.</p>
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000048-0071">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000048-0071</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 芸術社会学概観

山 岸 健

- 1 社会学理論と芸術社会学
- 2 芸術社会学の系譜と諸問題
- 3 芸術社会学の領域と性格

## 1 社会学理論と芸術社会学

芸術社会学の研究は、社会学の研究領域のなかで比較的開拓の進んでいない分野である。我国の社会学は、戦後、調査と理論の各領域において研究の深化をみたが、芸術社会学の研究は、いまなお出発点に立っているといえるだろう<sup>(1)</sup>。諸外国においては、近年にいたり、芸術社会学の研究業績が次第に集積されるにいたったが、それでもこの方面の研究の進展は、今後にまつところが多い。

ここでは、芸術社会学の系譜を概観し、その諸問題を発掘し、整理するにとどめ、個々の問題については稿をあらためて論じたい。

社会学の歴史にはいくつかの波があり、研究の流れは、多様であった。その一つの流れとして文化社会学がみられるが、芸術社会学の研究は、この文化社会学と深く交叉するものである<sup>(2)</sup>。しかし、芸術に関する社会学者の考察は、すでに H. Spencer, F. Tönnies, M. Weber, P. A. Sorokin などの研究にもみられるのである<sup>(3)</sup>。T. Parsons の理論においては、芸術の問題は、cultural system 及び expressive symbolism との関連であつかわれている<sup>(4)</sup>。社会学理論において芸術の研究がどのような位置をしめ、芸術の研究が社会学理論の構成に際しどのような貢献をなしうるかというこ

とは考えてみなければならない問題であろう。

ところで、芸術社会学は、文化の研究としてまず登場するが、社会学以外の学問でも芸術社会学について論じられてきたのである。例えば、美学や芸術史などを挙げることができる<sup>(6)</sup>。芸術社会学の系譜にあらわれるのは、社会学者の業績だけではない。人類学者や美学美術史学者の研究もこの系譜の一翼をになっているのである。これをみてもわかるように芸術社会学の研究頭域と視点については、混沌とした部分が少なくない。ここでは社会学以外の学問の業績をもとり入れながら芸術社会学の性格を浮彫りにしてみたい。

さて、芸術社会学のなかには芸術の種類に対応して、美術、文学、音楽、演劇、映画、建築、デザイン、芸能の社会学がある<sup>(6)</sup>。もとよりこのようなわけ方は確定したものではないが、芸術社会学の研究業績は、普通、以上の種類のいずれかを中心として発表されてきたのである。なかには、P. A. Sorokin にみられるように広くいくつかの種類にわたる研究も認められる。しかし、社会学の立場で芸術と正面から取り組んだ研究は、最近になってようやくみられるようになったといえるだろう。音楽、映画、演劇を対象とした芸術社会学には、本格的な研究がある<sup>(7)</sup>。

芸術社会学の理論をみがき上げ、芸術社会学の体系を整えるためには、まず以上のような各種の芸術と社会との関係を考察し、しかるのちに芸術の各分野を横断する理論を構築する必要があるだろう。だから、芸術社会学は、ある意味で、音楽や絵画の社会学として成立することもある。ここでは、主に対象を絵画に求め、芸術社会学の諸問題を整理して行くことにしたい<sup>(8)</sup>。そして必要に応じて他の芸術の分野にも言及する予定である。

人々の生活はいろいろな社会集団のうちで営まれている。芸術は特に人間の感情に訴える世界を作り、また意味の世界を生ぜしめる。そこでは、サインやシンボルを媒介としたコミュニケーション活動がみられる<sup>(9)</sup>。コミュニケーションは社会生活の営みにおいて中核的な機能を果すのである

が、芸術は T. Parsons の用語をつかえば、expressive symbolism と深い関連性を持つものといえるのである。

ここでは芸術<sup>(10)</sup>という言葉に二つの意味を与えてみたい。一つは、芸術行動<sup>(11)</sup>であり、第二は、芸術行動の所産としての作品である。このように解すれば、芸術には、絵画を中心に考えてみると、制作、享受、批評という行動と作品とが含まれることになる。芸術社会学の研究の主題は、社会行動、社会集団、文化という文脈で芸術をとらえ、芸術の社会的機能を考察するとともに、芸術が社会変動、文化変動とどのように交叉しているかを追跡することである。P. A. Sorokin の研究をまつまでもなく、芸術社会学の研究が文化変動の研究と密接な関連性を有することは明らかであり、芸術社会学は、この方面の研究において、社会学理論に寄与することもできる。文化変動を、芸術の場合には、様式と社会との関係から考えることができる。

文化の研究は、芸術、宗教、知識、言語などの社会学の研究を積み重ねて初めて精緻なものとなるであろう。芸術社会学は、宗教、知識、言語、技術の社会学の成果を接取しながら、芸術を通して社会、文化、個人の各々及びそれらの相互関係の分析に努めることを目標とするのである。<sup>(12)</sup> 芸術を通して社会、文化、個人のそれぞれをダイナミックにとらえることができれば、芸術社会学は、社会学理論のある部分において、とくに社会行動、コミュニケーションとシンボル、社会の構造と体制、文化変動などの諸理論に対して、寄与する点があるであろう。特に社会生活においてサイン、シンボルがどのような機能を果し、社会行動とサインシンボルがいかに結びついているかを考察することは、これまでの社会学の諸研究で比較的掘下げ方の足りない部分であった。この方面をこれからより深く考えて行く必要があるだろう。そのためには、言語学の研究成果を参考にとともに心がけたい。

社会学の理論においては、社会構造と社会変動の分析が究極の焦点であ

ろうが、これに加えて、文化構造と文化変動の考察をとりあげ、これら四領域の相互関係を考えて行く必要があると思われる。<sup>(13)</sup> 芸術社会学は、とりもなおさず文化構造と文化変動の分析を糸口としながら、社会構造と社会変動の考察にまで進む方向をたどるのである。

まず以上を前提として、次に芸術社会学の系譜をたどり、芸術社会学の諸問題を発掘してみよう。

- (1) フランスの美学者、Denis Huisman は次のように述べている。「芸術の社会学は、まだまだこれからである。これは、優れた精神が当然誘惑を感じるはずの問題なのに、奇妙なことに、社会学者はまだ、芸術と十分真剣に取り組んでいないのである。宗教や政治や、経済、法律、地理関係の諸領域では幾多の輝かしい業績を残したデュルケーム学派も、広大な芸術の領域については在庫調べをしていないのだ。」

Denis Huisman, *L'esthétique*, ドニ・ユイスマン, 久保伊平治訳, 美学, 101頁, 1954.

アメリカの社会学者 J. H. Barnett は、芸術を研究する社会学者は、社会史家、芸術史家、芸術評論家とまだはっきり分化していないとみて、芸術社会学が比較的新しいものであり、学問としても未成熟な点があることを指摘している。

J. H. Barnett, *The Sociology of Art*, *Sociology Today*, pp. 197~198, 1959.

マルクス主義の立場で芸術社会学をあらわした V. M. Fritche は、次のように述べている。彼はいわば造型美術ないしは空間芸術を主体として芸術社会学の構想をまとめたのである。

「芸術社会学は経済的基礎の上に打ち建てられたイデオロギー的上層機構の部門に関する総合的法則を設定する科学として、芸術的創造のあらゆる種類即ち建築、音楽、絵画、詩歌、彫刻を網羅しなければならないが、かように広汎なるあらゆる芸術の社会学を総合的に建設するためには、未だその時期が到来していないことは明白である。何故なら、芸術社会学はまだ余りに若い科学であり、的確に云えば、まだ存在していない、やっと胎生期に入ったばかりの科学であるからだ。」

フリーチェ, 昇曙夢訳, 芸術社会学, 序, 原書 1926.

(2) 芸術社会学と文化社会学の関係については稿を改めて論じてみたい。

蔵内数太はその著「文化社会学」において芸術社会学の問題について論じたが(昭和18年)、これは、我国における芸術社会学の研究としては道標となる研究である。彼は文化社会学の問題を、(1) 産出された文化形象、(2) 産出するところの文化制作者という二つの範疇でとらえたのである。

我国における文化社会学の文献として次の研究は、芸術社会学を考える場合に参考となる。

関 栄吉、文化社会学概論、昭和4年。

松本潤一郎、文化社会学原理、昭和13年。

蔵内数太、文化社会学、昭和18年。

難波紋吉、文化社会学と文化人類学、昭和23年。

樺 俊雄、文化社会学、昭和31年。

また、ドイツ文化社会学の系統では、M. Scheler, A. Weber, H. Freyer, K. Mannheim の研究が注目される。一方、アメリカの文化社会学では、W. F. Ogburn, F. S. Chapin, P. A. Sorokin の研究に注目したい。

A. Weber の提唱した社会過程、文明過程、文化運動において、芸術は創造という角度から文化運動に入することは、周知のとおりである。

K. Mannheim の知識社会学研究は、芸術を社会学の視点で考察する場合、参考となる点が少なくない。

文化社会学の研究をみる場合には、マルクス主義理論に対し社会学者がどのように立向ったかを考える必要があるだろう。今日の社会学における一つの頂点となる問題が、マルクス主義理論と社会学理論の関連性であることは、いうまでもない。

文化社会学のいま一つの論点は、文化変動の問題であろう。

文化社会学と芸術社会学の関係を示した例として次のような見方がある。

「芸術の社会学的研究はその目標が芸術の理解におかれていれば、芸術学に属するものであり、社会学は謂わば方法として用いられているにすぎないといえよう。しかし社会の理解にその究極の目標がおかれていれば、それは社会学に属する文化社会学的研究である。」

蔵内数太、文化の諸形態(Ⅱ)ーノンマテリアル・カルチュアについてー、林恵海・臼井二尚編、教養講座社会学、138頁。

(3) H. Spencer は、芸術を進化論的な立場でとらえた。

H. Spencer, System of Synthetic Philosophy, 10 vols., vol. 1: First Principles, 1862, 6th ed. 1900.

芸術史の哲学では、Spencer とそれに連なる研究の次のようなとらえ方がある。

「……この点いっそう示唆的であったのは Spencer の思想で、かれの進化と遊戯衝動との概念は、美的感覚の発達・効用の面において J. Sully, G. Allen, H. Marshall らの生理学的美学の試みへ、また遊戯衝動説の展開として K. Groos の生物学的立場、進化論の科学的実証として R. Wallaschek, E. Grosse らの人類学的立場、Wundt の民族心理学的立場等でのそれぞれ発生的・歴史的な芸術学 (Kunstwissenschaft) に連なるのである。そしてこれら芸術の科学的・歴史的研究にかつ応じ、かつ促されたものとして、一方では H. Taine, J. M. Guyau, G. V. Plekhanov らの実証的ないし唯物論的な芸術社会学的研究の諸方向も、また関連的にそこに取り上げられねばならないであろう。」

山本正男、芸術史の哲学、15頁、昭和37年。

F. Tönnies, M. Weber, P. A. Sorokin の研究では、次の文献が、芸術を扱っている。

F. Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*, 1887.

M. Weder, *Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik*, 1921;

P. A. Sorokin, *Social and Cultural Dynamics*, 4 vols., 1937—41; *Society, Culture, and Personality: their structure and dynamics*, 1947.

F. Tönnies は次のように述べている。

「人間の創造・造形・活動は、[すべて一種の芸術であり、いわば未知の素材に形体を与え、その素材に人間の意志を満ちあふれるほど注入する有機的活動である。人間のこれらの諸活動が、自然的な原初的諸関係の場合のように、ゲマインシャフトの維持・促進・喜悦に役立つ場合には、ゲマインシャフト自身の機能と考えることができる。……利益を獲得する術としての商業は、かかる術とはまったく似ても似つかぬものである。]

F. Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft*, 杉之原寿一訳、ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、岩波文庫、上、119頁。

- (4) T. Parsons が芸術をどのようにとらえたかを知るには、次の文献が参考となる。

T. Parsons, *Toward a General Theory of Action*, ed. with E. A. Shils, 1951; *The Social System*, 1951; *Working Papers in the Theory of Action*, with R. F. Bales & E. A. Shils, 1953; *Economy and Society: a study*

in the integration of economic and social theory, with N. J. Smelser, 1956; Theories of Society, ed. with E. A. Shils, K. D. Naegle, & J. R. Pitts, 1961.

- (5) Denis Huisman, op, cit., 1954.

山本正男, 前掲書, 昭和37年.

講座哲学大系6 芸術理論, 田中美知太郎編集, 昭和39年.

講座美学新思潮全5巻, 竹内敏雄監修, 昭和40—41年.

- (6) 文学社会学, 音楽社会学, 演劇社会学, 映画社会学という名称を使うことができる. 絵画社会学, 建築社会学という名称は, まだ一般的ではないが, このような名称の使用は許されるであろう.

デザインの範囲は広いが, ここでは都市デザインという使用法もあることを指摘しておきたい. この場合は, 都市社会学の領域と重複する部分がある.

L. Mumford, The Culture of Cities.

川添 登, デザインとは何か, 角川新書, 昭和36年.

黒川紀章, 都市デザイン, 紀伊国屋新書, 昭和40年.

栗田 勇, 都市とデザイン, SD 選書, 昭和40年.

拙稿, 都市の生活と都市の構造, 三田学会雑誌, 第58巻第11・12号, 昭和40年, 第7図, 96頁.

芸能社会学は, いわば, 我国の芸能組織, 伝統文化の領域を対象とする研究である.

拙稿, 家元制度に関する基礎的考察—芸術社会学における一つの問題—, 哲学第37集, 昭和34年; 家の存続について, 哲学第40集, 昭和36年; 寺院と家元制度, 哲学第43集, 昭和37年.

- (7) A. Silberman, The Sociology of Music, 1963.

G. A. Huaco, The Sociology of Film Art, 1965.

J. Duvignaud, Sociologie du théâtre: essai sur les ombres collectives, 1965.

- (8) 絵画を対象とする場合には, 作品, 制作者, 享受者の関係を基本として研究をすすめる必要がある. 社会学の枠組では, この場合, 階層や社会体制の問題に関する考察もおこなわれるのである. また, これまでの社会学における絵画の研究では, 様式と社会に対する考究が一つの主題であった.

W. Hausenstein, Die Kunst und die Gesellschaft, 1916.

A. von Martin, Sociology of Renaissance, 1963.

土方定一, 画家と画商と蒐集家, 岩波新書, 昭和38年.



なお、絵画以外の領域を含めて広範囲にわたる考察を試みた A. Hauser の *The Social History of Art* は、芸術社会学の代表的な文献の一つである。

いずれにせよ、絵画を社会学の視点で研究するに際しては、文化史、社会史、美術史の研究成果を積極的に援用しなければならない。社会的背景をかえりみない美術史の研究はないはずであるが、美術史の研究の主眼は、作品と作者に集中するであろう。芸術社会学の場合は、むしろ、ある作品が制作され、享受される、地域社会や階層や政治的状况などに分析の焦点がおかれるのである。

- (9) サイン、シンボルについては、哲学、言語学などの分野が優れた業績が発表されているが、社会学では、この方面の研究は、今後の開発をまつ点が多い。サイン、シンボルの研究が社会学に導入されると、おそらく社会学の新しい研究領域が開拓されることになるだろう。芸術社会学は、ある意味で、サイン、シンボルの社会学であり、コミュニケーションの社会学であるといってもよいだろう。

- (10) Denis Huisman によれば (前掲書)、芸術が他の人間活動と区別されるのは、その非写像的 (*non figuratif*) 性質であり、芸術によって、芸術の中にあらわされるのは、純粋な現実ではなく、人間によって見直され、訂正された現実であるという。いいかえれば、芸術は、その特有な方法による現実の転位 (*la transposition*) であり、卑俗な現実から現実を超えた世界、つまり、芸術が自主的な存在の中に建立する (*instaurer*) 世界への移行なのである。だから、芸術とは、現実の様式化であり、存在の昇格、形式の創造であると彼はいう。D. Huisman は、E. Souriau の芸術は建立的活動 (*l'activité instauratrice*) であるという考え方を踏襲している。

「芸術は、情緒、信念、観念などの広範囲にわたる人間の経験を美的形態で体现し表現する。その美的形態は感情に訴え、そして人間の心のなかに情緒的な反応や知的な反応をよびおこすのである。」

J. H. Barnett, *op. cit.*, p. 197.

J. H. Barnett は芸術を *fine arts* (音楽、文学、視覚芸術)、*combined arts* (舞踊、演劇、オペラ)、*applied arts* (焼物、織物デザイン、細密画) の三つに分類する。そして、芸術を研究する者は、また、*popular arts* (映画、ジャズ音楽、雑誌の読物、ラジオとテレビのドラマ) の存在と重要性を認めなければならないという。この *popular arts* は、いわば、*mass-media arts* なのである。

- (11) 品川清治によれば、気分と客観的な状況との間にムード領域 (*mood area*)

があり、芸術はこのムード領域から情況の領域へかけてその主要な社会的機能を営む。そして芸術行動を芸術象徴（芸術に使用される個々のシンボルによって組織された象徴体系としての、表現的象徴 [expressive symbol] が優位を占める象徴）の生産、流通、分配、消費のすべてを含む行動とみる。

品川清治、芸術行動、今日の社会心理学 5, 124—125頁, 130—131頁, 昭和38年。

- (12) 社会、文化、個人の相互関係の分析は、社会学の理論の究極の課題であろう、私は P. A. Sorokin, T. Parsons, F. Znaniecki の業績などを比較しながら、この問題を考えて行きたい。

F. Znaniecki, Social Relations and Social Roles, 1965.

- (13) 社会構造と社会変動については、次の研究から得るところが多い。

富永健一、社会変動の理論、岩波書店、昭和40年。

文化構造には、文化の定義、文化の内容、文化の組織、文化の機能などの諸問題を含め、文化変動には、発明、発見、創造、生産、接触、伝播、変容、流行などの問題を、一応、含めてよいだろう。文明と文化の問題は、文化構造と文化変動の両部門で考えることができるであろう。文化の機能の問題は、むしろ、文化構造と文化変動を連結させる場でとりあげてもよいと思われる。文化の研究を進めるにあたっては、文化人類学や社会心理学の研究成果をすすんで摂取しなければならない。

A. L. Kroeber & C. Kluckhohn, Culture: a critical review of concepts and definitions, 1963 は、文化に関する諸問題を考察するのに参考となる。

以上に述べた文化構造と文化変動の考え方は一つの試論にすぎない。

## 2 芸術社会学の系譜と諸問題

芸術社会学は、芸術行動、芸術集団、芸術の社会的機能、様式と社会について考察を進める一方、文化と社会の関係についても分析をおこなうのである。芸術社会学のこれまでの研究は、関連する他の諸科学との深い相互関係のもとで進められてきた。各学問の研究成果の相互交換と摂取は、最近とみに盛んとなったが、芸術社会学も例外ではない。もともと社会学、社会心理学、文化人類学は、特に密接な結びつきを持っていたから、芸術社会学と社会心理学、文化人類学との関係は深いものであった。文化人類

学は、<sup>(1)</sup>文化と芸術、芸術の始源、未開社会における芸術、宗教と芸術、芸術の社会的機能などの研究で芸術社会学に寄与してきた。精神分析学と社会心理学は、芸術行動や芸術の社会的機能の問題で芸術社会学に結びついた。また、制作や鑑賞の心理的過程の解明に際しては、芸術社会学は、芸術心理学に<sup>(2)</sup>負うところが多かった。さらに、芸術学、芸術哲学、芸術史(文学史、美術史、音楽史、演劇史、映画史など)、文化史、民族学、民族心理学、<sup>(3)</sup>哲学、言語学などの研究成果が、芸術社会学の研究に与えた影響は決して少なくない。知識社会学は、<sup>(4)</sup>イデオロギー研究という点で、芸術社会学と深く結びつくのである。いずれにせよ、芸術社会学は以上のような諸領域の研究を背景として、その体系を整えてきたのである。

さて、ここで芸術と技術、芸術と労働、芸術と遊戯、芸術とシンボルの諸問題に注目してみたい。普通、芸術と技術といった場合、両者を対立するとのみ考えるべきではなく、L. Mumford も言うようにこれらは、時代により効果的に結びついてきたと考えられる。<sup>(5)</sup>しかし、芸術は、意味、価値、感情、共感、表現と結合して人間の内面的、主観的な側面に関連するもので、これに対し技術は、人間が自然力を自己の目的のために支配し操作する活動であるといえよう。芸術行動は、共感やコミュニケーションをともなって社会行動となり、そこには作品を媒介とした人間関係が成立し、そのような社会的状況において、シンボルとしての作品は、意味や価値の世界を形成するのである。こうして、芸術行動は、社会学の領域に入る問題となる。芸術行動は現実の生活からのたんなる逃避行動でもなければ、病理的行動でもない。芸術行動は社会生活の営みにおいてむしろごく自然な日常的行動なのである。芸術と労働<sup>(6)</sup>については、リズムと芸術、芸術の発生、芸術の社会的機能という問題が浮んでくる。遊戯と芸術の関係に関しては、それらが日常生活でどのような位置を占めているかを考えながら考察をすすめるなければならない。J. Huizinga は、homo ludens (遊戯人) という考えを展開したが、<sup>(7)</sup>彼の所説には注目すべき点が少なくない。サイ

ン、シンボルについては多くの問題があるが、ここでは、作品をシンボルとしてとらえ、人間はシンボルを創造しそれを操作しながら社会生活を営むものであるということを認めたい。<sup>(8)</sup>したがって、R. Bain の言うように文化はシンボルを媒介としたすべての行動である、という表現もできるのである。

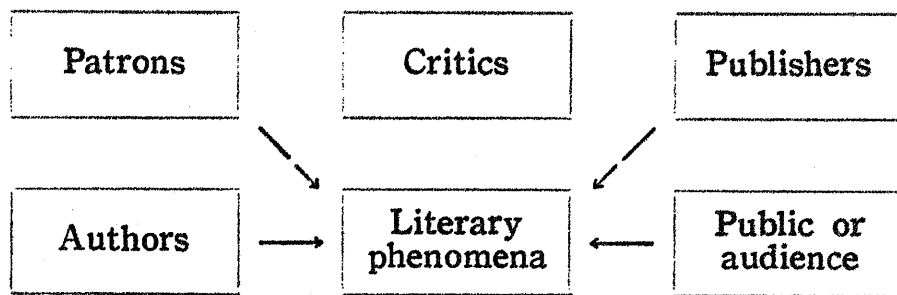
ところで、現在、芸術社会学が包含する問題としては、現代社会における芸術の位置、大衆芸術、余暇と芸術、複製芸術などの諸問題を挙げることができる。<sup>(9)</sup>アメリカにおける芸術社会学の研究は、このような今日の問題によって触発され、このような問題の分析をめざした例が、少なくない。たしかにこれらの問題と正面から取組む必要は、芸術社会学に認められるのである。コミュニケーション研究や余暇活動の研究は芸術社会学の研究と深い関連性がある。

次に芸術社会学の系譜をたどってみよう。芸術に関する研究は、次第に実証性を増してきたが、ある角度でとらえると、美の理念の形而上学・美の先験的価値を考察する哲学・経験的な美意識の解明をはかる心理学・美の具体的事実として芸術の現象を把握しようとする芸術学・社会学的芸術理論という段階も考えられる。<sup>(10)</sup>Denis Huisman は、美学は独断主義、批判主義、実証主義の三段階を歩んできたとみて、理論的には、それは、芸術哲学、芸術心理学、芸術社会学の三段階であったと述べている。<sup>(11)</sup>また、J. M. Guyau の「社会学上より見たる芸術」を拠り所として考えると、イデアの美学（プラトン）、認識の美学（カント）、第三に社会的共感の原理による美学を考えてもよい。<sup>(12)</sup>美学の領域においては、芸術社会学は、このようなかたちであらわれる。だが、ここでは、芸術社会学を美学の領域ではなく、社会学の領域で把握しなければならない。ただし、芸術社会学の系譜を考える場合、美学の業績を軽視することはできないであろう。そこで系譜のとらえ方であるが、その一例として次のような試みもみられる。<sup>(13)</sup>（1）社会における芸術の効果にだけ着目する社会学的美学の試み、（2）認識の目的

を美そのものに求めず、芸術的所産を資料として眺める美学的社会学、(3) 主に芸術の発生を文化的条件から説明する社会進化論、(4) 芸術の構造を社会関係のうちに捉えるマルクス主義、(5) 各ジャンルの個別的な芸術研究者の社会的視点からの接近、(6) 社会的共感による把握、(7) 精神史的な様式論、(8) 精神分析的解釈。この場合、(1) (2) は、芸術の研究に客観主義的な態度や方法を導入した点で功績があり、(3) は芸術の社会的性格を明らかにするために寄与したのである。

ところで、芸術社会学の研究を進めるにあたっては、芸術家の発言を無視することは許されないのであって、一方では芸術論や芸術家の伝記を参照すると共に作品それ自体の考察も要求される。例えば音楽では、Ludwig van Beethoven (1770—1827)、絵画では、Leonardo da Vinci (1452—1519)、Vincent van Gogh (1853—1890)、彫刻では、François Auguste René Rodin (1840—1917)、演劇では、Konstantin Sergeevich Stanislavskii (1863—1938)、建築では、Le Corbusier (Charles Edouard Jeanneret, 1887—1965) などの所説に注目してみたい。<sup>(14)</sup> 芸術家の創造の問題、芸術家として立つまでの過程の問題、交友関係、パトロンの問題などを考察するためには、このような方法を使用することも意味がある。

作品や芸術家に焦点を合せた芸術社会学の研究としては、W. H. Bruford の Anton Pavlovich Chekhov (1860—1904) の研究がみられる。<sup>(15)</sup> これは文学社会学の研究であり、そこでは、Chekhov の作品にあらわれる社会階層、職業、時代の状況の分析が、Chekhov の生きたロシア社会との関連性においておこなわれている。このような方法は、文学社会学の一つの典型的な行き方である。それとともに文学社会学の問題点は、作品の享受者にある。作品をめぐる作家、批評家、享受者（読者）が、どのような関係を結んでいるかを考えてみると、その作品の背景にある社会構造が浮び上るはずである。G. A. Huaco は、文学現象は、次のような図に示される五つの特殊な社会構造によって包囲されているとみる。<sup>(16)</sup> このような図式



第 1 図 文学の社会構造

は、音楽、演劇、映画、絵画、建築などの領域においてもややかたちをかえて描くことができるのである。この点については、後に再考したい。

J. M. Guyau は、小説は社会学的法則の簡略でしかも力強い説明であると述べ、小説がはじめて真に社会的となったのは、ありのままの人生とありのままの社会とを表現することを目的とした Honoré de Balzac (1799—1850) からであるという<sup>(17)</sup>。多くの文学作品は、多少とも、その作品がうみ出された時代と社会とを反映しているから、文学社会学で作品を通して社会階層や享受者の立場、時代の思潮を考えてみることができるだろう。どのような社会階層がその作品の享受者であったか、という問題を考えることは、文化の推進者を考えることにほかならないのである。

文学社会学の系譜の初めにあらわれるのは、Madame de Staël の研究である<sup>(18)</sup>。彼女は、文学と宗教、慣習、法律の相互関係を検討しようと試みたのである。それは、社会を通して文学の多様性を分析する研究である。一方、H. Taine は、人種、環境、時代の三因子によって文学現象は決定されると説いた<sup>(19)</sup>。フランスにおいては、近年にいたり R. Escarpit が、文学の社会学を著しているが (1958年)、彼は、作者、作品、公衆 (作家、書物、読者) を文学事実の前提とし、作品の生産、分配、消費の分析を中心とする、書物の社会学ともいえる文学社会学を構想した<sup>(20)</sup>。ここでは、出版者や書籍販売業者についても述べられており、出版の機能や広告技術に関する考察もみられるのである。彼は、作品の流通過程の分析を文学社会学の主題とみたが、彼の研究で注目されることは、文学者の世代について

研究をおこなった点である。そのほか、文学の社会学とみられる研究は多数あるが、L. L. Schücking の文学趣味の社会学的分析などが注目される。<sup>(21)</sup> 文学の意味を広く解釈すれば、神話、伝説、諺、世論、宣伝などの研究と文学社会学の研究とは決して無縁ではないし、言語学や意味論の研究と文学社会学の研究は深い関連性を有するのである。<sup>(22)</sup>

C. R. Jones は、文学を詩歌、小説、戯曲という狭い意味に解すると、文学に関する社会学的分析は欠けていると述べ、文学が社会統制の機能を果すことにこれまで社会学者は気付かなかったという。彼によれば、それぞれの大きな社会的事件は、偉大な文学作品の出現によって印づけられてきたのである。この場合、それらの作品は、その時代の状況や抑圧された人々の希望や恐怖を劇的に描いたのである。社会学者は次のような事件と作品の関係を指摘できると彼はみるが、その例は、A. Voltaire の著作がフランス革命に与えた影響であり、H. B. Stowe の「アンクルトムの小屋」が黒人奴隷制度の問題に対し及ぼした影響である。<sup>(23)</sup> 文学社会学の諸問題については後に補足することにして、現に絵画社会学の系譜の一端をかえりみたい。

絵画社会学の主題は大別して二つに分けられるであろう。一つは、様式と社会の問題であり、第二は、作品をめぐる社会構造の問題である。絵画社会学研究の系譜を通じて、この二つの問題は、常にからみ合う問題としてそれぞれの研究者が追跡した主題であった。美学美術史の分野では、A. Riegl, H. Wölfflin, M. Dvořák, W. Worringer などの研究が、絵画の社会学の研究に寄与してきたが、それは、主に様式と社会の問題領域においてである。<sup>(24)</sup> これら美学、美術史の研究は、様式論という点で共通するものがあり、また、世界観、精神史という視点でも共通するところがない。芸術社会学の系譜を考える場合、精神史的な様式論の流れをとりあげる試みがみられるのは、故なしとしないのであるが、しかし、これらの研究は、芸術社会学の理論を構成するために寄与するものの、芸術社会

学の系譜の本流に位置するとは考えられない。芸術社会学の系譜の本流に社会学者の芸術研究をすえ、それとの関連において他の学問領域における研究で芸術社会学の諸問題を分析した研究を位置づけて、芸術社会学の系譜を完成させることができるだろう。だが、これは容易な試みではない。

次に W. Hausenstein, A. Hauser, A. von Martin の研究の一部を考察しよう。W. Hausenstein によると、<sup>(25)</sup> 造型芸術は素材と形式の二つの見地から観察できるが、芸術は形式であるから、芸術社会学は、結局、それが形式の社会学である時にのみ、その名に値するという。そしてこの形式はある時代の限定的な財産であるとみなされる。しかし、素材と形式は、普通混交したかたちで現れるものであり、この点について彼は、絵画はある完成した物として存在しており、それは既に素材と形式との分け難い統一体であるとし、さらに、各々の時代はそれぞれその時代特有の素材に対する形式感情を持ち、この形式感情の実現は、しばしば素材を通じて或る時代特有の社会的形態に結び付くとみる。ここでいう素材は、何が描かれているか（人物、動物、風景、静物など）ということであり、形式とは、それがどのように表現されているか、ということである。西洋における肖像画の出現は、都市社会の動的文化においてあらわれたと彼はみる。さらにルネッサンスの芸術をブルジョア的商品経済という角度でとらえるのである。形式の例としては、形式的芸術と非形式的芸術、平面的様式と立体的様式、装飾的様式と自然的様式などが挙げられているが、ここでは、前向きの法則 (Gesetz der Frontalität) についてみよう。彼は社会的な事実であるこの法則は、封建的ないし教権制度的文化の支配的な形式的特性であり、エジプトその他においてあらわれるものである、という。なお、エジプトなどでは、形の大きさ（巨大性）が様式的手段として用いられるが（スフィンクス、ファラオの像）、これも一定の社会を前提としてのみ可能であるとみるのである。エジプト芸術を社会経済史的に研究した M. 3. Матве (エム・エ・マチエ) は、階級的諸関係の形成とともに、エジプト



芸術はファラオの権力および社会上層部の奴隷所有者の強化と称揚の目的で、被搾取大衆の心にイデオロギー的影響を与える手段をとったと述べている。<sup>(26)</sup> 社会経済史の角度での芸術の研究は、芸術社会学の系譜に結びつく場合が少なくないのである。

さて、美術と文学の社会史を著した A. Hauser の研究は、<sup>(27)</sup> 具体的な事実を駆使して芸術は社会の構造や動きに制約される、という命題を追求した研究であった。彼がエジプトにおける芸術家の地位と芸術活動の組織化について論じたところによると、ここでは芸術家の顧客は祭司と諸侯であり、また芸術家の仕事場として一番重要であったものは、祭殿と宮廷であった。芸術家はそこで身分の自由なあるいは不自由な使用人として働いた。エジプトでは墓を飾るための作品の需要が当初から非常に大きかったので、芸術家という職業の独立はかなり早い時期であったと考えられるが、しかし、芸術は他の目的のための手段であることが強調され、実際上の目的のなかに完全に埋没してしまっていたから、芸術家の人格は作品の陰に隠れ、ほとんど表面に出てこない。つまり、画家も彫刻家も、個人としては決して表面に出てこない匿名の職人であり、この状況はエジプトの芸術を貫いてみられたことであった。精神労働と手先の仕事との区別が云々されたのは、建築家の場合に限られ、彫刻家と画家とは、職人でしかなかった。エジプト史の初期においては、画家や彫刻家の社会的地位は、目立たないものであった。また、エジプトでは作品制作の組織化が進んでおり、それはあたかも中世における建築現場の作業方式を思わせるほどのものである。個々の作業段階の専門化と統合、助手の雇入れとその多面的活用などがみられたが、このような作品制作の組織化が行われる背景には、いつも同じ型の作品が注文されたという状況があったのである。中帝国時代には作品の類型化が生じた。強い階級意識を持った封建貴族が巾をきかせるにいたる中帝国の時代に入り、初めて、宮廷芸術及び宗教芸術に形式的な様式が生じ、それ以後、自由意志による表現形式は一切おさえつけら

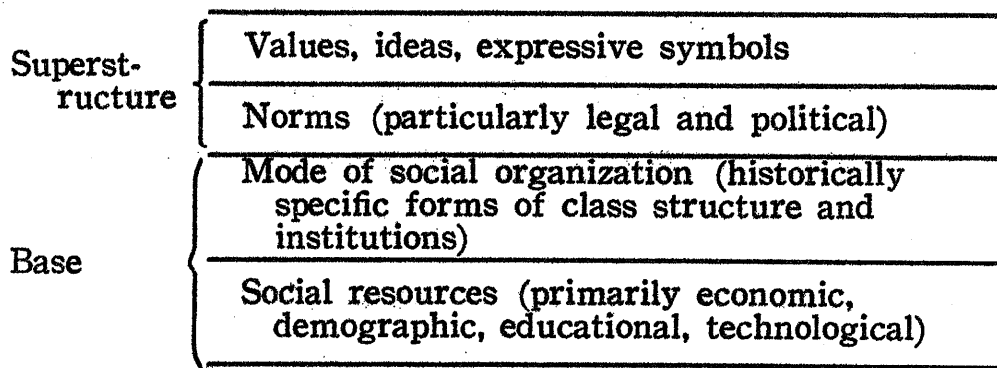
れてしまう。この形式は、超個人的な高級の社会秩序、その偉大とその光輝とを王の恩恵に負う一つの世界という理念の表現にほかならない。こうして中帝国の時代になると、肖像の持つ魔術的性格は失われ、自然主義的な描写もまた影をひそめる。王の像は、ひとりの個人の像であるよりも前にまず、ひとりの王の像でなければならなかった。エジプト人は、作品の制作に当ってはたんに美的観点だけを標準にしないで、作品のなかに日常生活の行動の場合と同じ基準を導入しようとしたのである。A. Hauserによると、正面性の原理は、鑑賞者に対する関係を強調する芸術であり、それは、象徴の芸術であるとともに、尊敬を要求する芸術、尊敬を惜しまない芸術でもあったという。王の名誉を顕彰し、その徳をたたえることを目的とした宮廷芸術は、すべてなんらかの意味でこの原理を含み、鑑賞者なり注文主なり、あるいは王なりに正面を向けようとしているが、この場合、鑑賞者や王はこれらの作品にくわしいものとみられており、このような人々に対しては幻覚技法を用いる余地などはないのである。彼は、このような例は、のちの古典的宮廷戯曲の中にも明確にその痕跡をとどめてみるとみて、この場合、俳優は、あらゆる手段をつくし、今ここで自分が演じているのは、一つのフィクションであり、協定された遊戯規則に従って催されている気ばらしにすぎないということを強調すると述べている。注目すべきは、彼が正面性の原理にたつこの芸術は、自然主義的戯曲という過渡の段階を経て、その正反対の極である映画へと進んで行くと述べた点であろう。彼の研究は、クアトロチエントの市民芸術と宮廷芸術の鑑賞者層やルネッサンスにおける芸術家の社会的地位などにも考察の眼を向け、芸術史の広い領域を様式と社会、制作者・享受者・パトロンの関係、芸術家の社会的地位と役割、都市の文化と芸術、芸術の社会的機能、宗教と芸術、芸術家の組織などの角度から分析したもので、ここには、芸術社会学の主要な問題がほとんど論じつくされているといつてよい。

A. von Martin は、ルネッサンスの社会学において、社会構造の変動

をとらえ、ルネッサンス芸術が、当時の社会階層によりどのように支持されていたかを分析している。都市の発展、ブルジョアジー、インテリゲンチヤなどに視点をすえ、ルネッサンス芸術の流れをとらえる一方、宮廷や教会がこの芸術にどのような影響を及ぼしたかが問題とされるのである。彼の場合、社会学の枠組として使用されたものは、社会構造、階級、階層、地位、役割、社会体制などの考え方である。彼によると、ある時代精神の社会的な機能や社会的条件づけと常にかかわらなければならない社会学上の間に対する答えは、それが、経済、政治および文化の領域における支配階級によって決定されることであるという。彼のこの研究は、ルネッサンス芸術の表面的な形式の背後にある社会的現実、彼の言葉を使えば、財産と知識を所有する階級 (class of "property and intellect") を分析する試みであるが、それは、彼等がルネッサンスの文化を生み出したからである。かくして、ルネッサンスの類型的にみた重要性は、ルネッサンスが、中世時代と近代との間の最初の文化的社会的な突破口の特徴を有するからだとみなされる。彼はこうのべている。社会学者にとってこの時代が興味深いのは次のような事実にある。つまり、ルネッサンス時代は、社会学者にブルジョアジーによって支配された文化上の時代の理想型として完全に一つのリズムを持った進展を示すからなのである。<sup>(28)</sup>そして、ルネッサンスのきわだった理想型は、イタリアの状況、特にフィレンツェの場合である。ルネッサンスの新しい芸術は、当時の都市の位置と力を反映している。フィレンツェのブルジョアジーの誇りはいろいろな作品にみられるが、とくに大伽藍 (Duomo) は、Giotto を中心として建立されたブルジョアジーの性格が刻まれた作品である。この大伽藍の建立は、フィレンツェ共和国の公共的事業の一部であり、市民達は、身をもってこの仕事の細部にまで取組んだ。だから、都市の名声と主権に対する偉大な芸術的記念碑は、花咲くばかりの経済上、政治上、文化上の生活を営む市民自身の高揚のシンボルとみなされたのである。A. von Martin は、また、ブルジョア

芸術の最も注目すべき発展の一つを裸体画の出現とみるが、この背後には、当時の社会の新しい動きがあった。<sup>(29)</sup> A. Hauser は、ルネッサンス芸術の鑑賞者層は、都市の市民階級と王侯居住地の宮廷人との二者からなるとみた。

映画社会学の研究については、最近、現代社会と芸術、大衆芸術、マスコミュニケーション、イデオロギー、シンボルなどの視点で注目すべき問題が少なくない。<sup>(30)</sup> 映画は、その制作、享受の両面において集団的性格を持ち、また技術と芸術の混交したものとして他の芸術とは異なった位置を占める。現代社会における芸術を研究する場合、映画を手掛りとする試みをみのがすことはできないのである。ここでは、この分野の最も新しい研究である G. A. Huaco の研究をみるにとどめたい。<sup>(31)</sup> 彼は、ドイツ表現派映画 (The German Expressionist Film: 1920—1931)、ソ連表現的写実主義 (Soviet Expressive Realism: 1925—1930)、イタリア新写実主義 (Italian Neorealism: 1945—1955) の三つの流れを主題として、映画社会学の研究をおこなった。彼の研究は、次のような社会学理論の枠組を基礎としておこなわれたのである。その第一は、巨視的モデル (macroscopic model) であり第二は中範囲のモデル (middle-range model) である。第一のモデルは、全体社会における主要な政治、社会、経済変動を分析するものであり；第二のモデルは、当面の芸術、映画ないしは文学の歴史的に特殊な社会的母型 (social matrix) を分析する。これら二つのモデルを連結する考えは、次のようなものである。彼によれば、全体社会における主要な政治、社会、経済変動は、社会的母型を構成する社会構造を通じて開溝されたり、濾過されたりしながら、芸術、文学あるいは映画に影響を与えるようになるという。彼の巨視的モデルは、次のような図式となるが、これはマルクスの理論の修正された説明であり、また N. J. Smelser の研究から借用した範疇を使用するものにほかならない。<sup>(32)</sup> このモデルに従えば、社会変動の主たる源は、社会的資源と社会組織の特殊な形態との間に



第2図 巨視的モデル

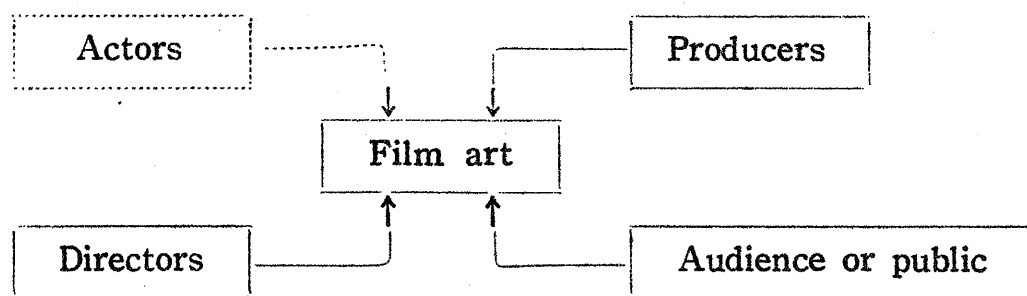
みられる緊張ないしは適合の欠除 (“lack of fit”) にほかならない。<sup>(33)</sup> 映画は、表現的シンボル (expressive symbol) という範疇の一部だから、このモデルによると、映画の波動 (film wave) が現われたり存続したりするために必要な条件は、問題とされる社会にみられる芸術の伝統、政治的、法律的規範、社会組織の形態、社会的資源などのなかに見出されるのである。彼はドイツ、ソ連、イタリアにみられた三つの映画の波を、以上の諸条件との関連において把握した。いいかえれば、監督、カメラマン、製作者、俳優、技術者という職能が分化し、映画製作に必要な撮影所が備わり、映画の波動を流れるイデオロギーと背反しない映画産業の組織形態があり、また、ある一定のイデオロギー及び様式を持つ波動と相反しないような政治的状況がみられてこそ、特定の様式で統一されるような映画の波動があらわれる、というのである。この四つの条件は、巨視的モデルの主要な範疇から引き出された下位範疇なのである。年代的にとらえると、ドイツの表現主義は、第一次世界大戦の後におこり、ソ連の動態的リアリズムは、1917年の革命と内乱の後に始まり、イタリアのネオリアリズム映画は、第二次世界大戦の直後に始まったから、いずれの場合も、この三つの映画の流れに必要な条件のいくつかは、戦争によってもたらされたものである。<sup>(34)</sup> という。

ところで、映画芸術の社会構造を、G. A. Huaco にならって描くと、第4図のような図式となるが、この図式がすでに掲げた文学の社会構造と異

War	Interval	Beginning of Wave
1914—1918	1 year, 3 months	1920: Caligari
1917—1921	4 year	1925: Strike
1939—1945	No interval	1945: Open City

第 3 図 戦 争 と 映 画 の 波 動

なるわけは、彼によると映画の場合は、パトロンと映画製作者が普通同じであり、映画批評 (film criticism) の首尾一貫した伝統がみられないからであるという (第 1 図をみよ)<sup>(35)</sup>。そして映画の社会関係のなかには、俳優があらわれる。この俳優は、映画史の示すとおりに、映画の開花期においては、完全に監督に従属していたが、映画が大衆文化の一部となっている今日では、この逆となっている。今では、娯楽本位の映画産業の発展と映画スター (powerful and wealthy “stars”) の抬頭とは構造的につながっているように思われると彼は述べている。研究の方法としては、以上のような社会構造を形成する個々のメンバーについては、伝記資料を用いたり、面接法によって研究を行い、映画産業の組織は、制度、官僚制という視点から研究されるのである。以上が G. A. Huaco の映画社会学の研究であるが、芸術社会学のなかでも、この方面の研究は、これからますます進められるにちがいない。



第 4 図 映 画 の 社 会 構 造

演劇社会学の系譜で注目される業績としては、Julius Bab の研究がある<sup>(36)</sup>が、ここでは、俳優、劇作家、観衆が、演劇の本質的な三体として把握され、俳優の社会的地位と役割、俳優の組織、劇作家の地位と役割、劇場建築と劇場組織<sup>(37)</sup>、演劇と宗教、演劇と政治などに関する考察が試みられてい

る。

音楽社会学では、まず、M. Weber の研究を逸することはできない。<sup>(38)</sup> 彼は、東洋と西洋との対比において、音階、旋律などの類型を分析したのであるが、ここで考えてみたいのは、特に彼がその多方面にわたる研究の一環として合理性という視点で音楽を位置づけたということである。最近では、A. Silbermann が、社会・音楽集団 (socio-musical groups) の構造、その機能、その行動の分析を中心に音楽社会学を構築したが、この場合には、社会活動、社会生活、人間関係、集団、社会的態度、制度などを枠組として音楽の研究が行われている。<sup>(39)</sup> A. Silbermann によると、音楽社会学の全研究領域を次の三つの視点に要約することができる。第一は、一定期間にわたるある社会・音楽的形式 (socio-musical patterns) の進展の条件とそのかたちを考察する動態的研究 (dynamic study) であり、第二は、社会・音楽的形式の本質と形式間の差異を考察し、社会・自然的関係 (socio-psychical relationships) にその形式をおき、全体としての文化との関係においてその形式がどんな重要性を持つかを考える機能的記述的研究 (functional and descriptive study) であり、第三は比較研究 (comparative study) であって、これは、現在および未来における社会的適応の方向を発見するために相こととなった社会・音楽的形式を比較するものである。かくして、音楽社会学は次のような諸問題の研究より構成される。第1、社会音楽的組織は集団成員の欲求を充足させるために集団内の個人の相互作用から生ずる現象であるが、そのような組織の構造と機能の一般的な性格づけの研究、第2、社会・文化変動に対する社会・音楽的組織の関連性決定の研究、第3、次のような視点からの社会・音楽的集団の構造分析の研究、その視点とは、成員の機能的相互依存、集団の行動、集団内で行われた役割と規範の組織及び効果、統制作用である、第4、機能に依存する集団の類型の研究、第5、音楽生活において必要な変更の計画と实际的洞察の研究。このような研究領域を、A. Silbermann は規定し

ているのである。<sup>(40)</sup>

さて建築社会学では、建築の構造、形態、機能を社会集団の枠組で考察しなければならないだろう。<sup>(41)</sup> フィレンツェの大伽藍は、市民の誇りをあらわすシンボルで、<sup>(42)</sup> 都市の住民に強く訴えたし、また、他のゴシック様式の教会建築も、一般の住民に支持され都市のシンボルとして機能したが、それはまた、当時の社会階層と社会体制にも関係している。建築様式の地域的、時代的变化もまた社会学の角度で考察しうる問題である。建築と政治、経済、宗教、技術との関連性、建築の設計者、職人の社会的地位、職人の組織、などを考えてみることも必要である。

芸術社会学の系譜を以上のように芸術の種類に応じて概観してきたが、ここで挙げたのは、それぞれの領域の研究の一例にすぎない。また系譜を示す場合、以上のほかに問題別、学問領域別、国別などの考察を進めることもできる。問題別に考えれば、一応、一般理論、芸術の始源、芸術と遊戯、芸術と労働、芸術様式と社会、芸術と宗教、芸術と政治、芸術と経済、芸術行動、サインとシンボル、芸術コミュニケーション、芸術の社会的機能、制作者と享受者などの問題を分けることができるが、これらの問題は、相互に密接な関係がある。さらに時代別には、例えば古代ギリシャ、ローマの時代から中世ないしは、ルネッサンスに至る芸術などを対象として、それぞれの芸術社会学上の問題を解明することもできる。

ここで一つ注目すべきは、マルクス主義芸術論の流れである。<sup>(43)</sup> マルクス主義芸術論こそ芸術社会学であると考えた見解もあったが、このような見方が狭いかたよったものであることはいうまでもない。なぜならば、芸術社会学の流れの一環としてマルクス主義芸術論を認めることに異論はないが、しかし、芸術社会学の流れには多様な性格がみられ、芸術社会学の領域、社会学理論と芸術社会学の諸問題の関連性ということを考えてみると、マルクス主義芸術論によって芸術社会学を代表させること自体に無理があるからである。けれども、芸術社会学が、今後マルクス主義芸術論を



どのように批判しながら摂取すべきかは、今日、社会学とマルクス主義理論の関係が一つの論点となっているごとく、看過できない課題なのである。

- (1) F. Boas, *Primitive Art*, 1927; *Race, Language and Culture*, 1940.  
B. Malinowski, *A Scientific Theory of Culture and Other Essays*, 1944.  
R. Linton, *The Cultural Background of Personality*, 1945.  
M. J. Herskovits, *Cultural Anthropology*, 1955.
- (2) N. C. Meier, *Art in Human Affairs: an introduction to the psychology of art*, 1942.
- (3) W. M. Wundt, *Völkerpsychologie*, 10 Bde., 1900-20; *Elemente der Völkerpsychologie*, 1912.
- (4) M. Scheler, *Die Wissensformen und die Gesellschaft*, 1926.  
K. Mannheim, *Ideologie und Utopie*, 1927; *Essays on the Sociology of Knowledge*, 1952.  
F. Znaniecki, *The Social Role of the Man of Knowledge*, 1940.  
R. K. Merton, *Social Theory and Social Structure*, 1949.
- (5) L. Mumford, *Art and Technics*, 1952.
- (6) K. Bücher, *Arbeit und Rhythmus*, 1896.
- (7) J. Huizinga, *Homo Ludens*, 1938.

彼の遊戯に関する考察は、文化や芸術について研究を進める場合、参考となる点が多い。芸術社会学の基礎的な問題である芸術行動を考察する場合には、いずれにせよ、芸術と遊戯、芸術と労働などの間に対する洞察が必要なのである。

彼によれば、遊戯は、一つの自由な行動であり(自由)、日常のあるいは本来の生ではない。また、遊戯は、それが行われる場とその持続時間とにより、日常生活から区別される(完結性と限定性)。遊戯の最も本質的な特性の一つは、反復の可能性である。

「また、遊戯には、固有の規則がある。遊戯とはあるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行なわれる自発的な行為もしくは活動である。それは、自発的に受け入れられた規則に従っている。その規則は一旦受け入れられた以上は、絶対的拘束力を持っている。遊戯の目的は行為そのものの中にある。それは、緊張と歓びの感情を伴い、または、これは<日常生活>とは、<別のものだ>

という意識に裏づけられている」。ヨハン・ホイジンガ、高橋英夫訳、ホモ・ルーデンス、58頁。

彼は、ミューズの芸術（音楽、詩）と造形芸術（建築、彫刻、絵画など）と遊戯の関連性を次のようにとらえる。音楽は、遊戯領域の中にあり、そこから出ないが、造形芸術は、遊戯領域の外にある。そして、舞踊（これは音楽的であるとともに造形的である）は、ミューズの芸術と造形芸術の中間にあり、遊戯の境界領域に位置する。

- (8) C. K. Ogden and I. A. Richards, *The Meaning of Meaning*, 3rd ed., rev., 1930.

G. H. Mead, *Mind, Self and Society*, ed. by C. W. Morris, 1934.

T. Veblen, *The Theory of the Leisure Class*, 1934.

S. Langer, *Philosophy in a New Key*, 1942.

E. Cassirer, *The Philosophy of Symbolic Forms*, trans. R. Mannheim, 1953; *An Essay on Man*, 1944.

S. I. Hayakawa, *Language in Thought and Action*, 1949, 2nd ed., 1964.

築島謙三、文化心理学基礎論、昭和37年。

山元一郎、コトバの哲学、昭和40年。

- (9) B. Rosenberg and D. M. White ed., *Mass Culture*, 1957.

J. F. Cuber, W. F. Kenkel and R. A. Harper, *Problems of American Society; value in conflict*, 1948, 4th ed., 1964.

J. Cassou, *Situation de l'art moderne*, 1950.

L. Dodd and others, *Forum Lectures on Visual Arts*, 1960.

C. Greenberg, *Art and Culture*, 1961.

D. J. Boorstin, *The Image*, 1962.

現代芸術の思想、岩波講座現代の思想 X、昭和32年。

講座現代芸術、I-VII、昭和33年。

多田道太郎、複製芸術論、昭和37年。

現代の芸術、岩波講座現代10、昭和39年。

- (10) 佐々木斐夫、芸術社会学、福武・日高・高橋編、社会学辞典、昭和33年、211頁。

- (11) Denis Huisman, 邦訳、美学、第一部第二部を参照。

- (12) J. M. Guyau, *L'art au point de vue sociologique*, 1889, ギュイヨー、大西克礼、小方庸正訳、社会学上より見たる芸術、3冊、岩波文庫、昭和5年-6年。

- (13) 佐々木斐夫、芸術社会学、前掲書。

- (14) 邦訳で、次のような文献がみられる。

小松雄一郎, ベートーヴェン書簡集, 岩波文庫; 同訳編, ベートーヴェン音楽ノート, 岩波文庫; 杉浦明平訳, レオナルド・ダ・ヴィンチの手記, 岩波文庫; 裕伊久助訳, ゴッホの手紙, 岩波文庫; フアン・ゴッホ書簡全集, みすず書房; 高村光太郎訳, ロダンの言葉抄, 岩波文庫; スタニスラフスキー, 蔵原惟人訳, 芸術におけるわが生涯, 岩波文庫; ル・コルビュジエ, 生田勉他訳, 伽藍が白かったとき, 岩波書店.

- (15) W. H. Bruford, Chekhov and His Russia: a sociological study. 1947.
- (16) G. A. Huaco. The Sociology of Film Art, 1965, p. 20.
- (17) J. M. Guyau, 邦訳, 前掲書第二部上10頁, 29頁.
- (18) Madame de Staël, De la littérature considérée dans ses rapports avec les institutions sociales, 1800.
- (19) H. A. Taine, Philosophie de l'art, 1881.
- (20) R. Escarpit, Sociologie de la littérature, 1958.
- (21) L. L. Schücking, The Sociology of Literary Taste, 1944.
- (22) C. R. Jones, *The Sociology of Symbols, Language and Semantics*. edited by J. S. Roucek, Readings in Contemporary American Sociology, 1961, pp. 437-449.
- (23) C. R. Jones, op. cit., p. 448.  
彼はこのほか, J. Steinbeck の Grapes of Wrath を挙げている.
- (24) A. Riegl, Stilfragen, 1893.  
H. Wölfflin, Kunstgeschichtliche Grundbegriffe, 1915.  
M. Dvořák, Kunstgeschichte als Geistesgeschichte, 1924.  
W. Worringer, Abstraktion und Einfühlung, 1908.
- (25) W. Hausenstein, Bild und Gemeinschaft, 1920.
- (26) エム・エ・マチエ, 秋田義夫訳, エジプトの美術, 昭和35年, 原書, 1958.
- (27) A. Hauser, Sozialgeschichte der Kunst und Literatur, 英訳, The Social History of Art, 1962, アーノルド・ハウザー, 高橋義孝訳, 芸術の歴史, 三卷, 昭和33年.
- (28) A. von Martin, Sociology of Renaissance, 1963, preface xvii-xix, p. 3.
- (29) A. von Martin. op. cit., pp. 25-26.
- (30) なお, 政治体制の相違が, 映画製作にどのような影響を及ぼすかも問題となる. 映画は, コミュニケーションの媒体として, 社会生活に多大の影響を及ぼす場合もある. 映画と宣伝についても考えてみたい.  
UNESCO, The Film Industry in Six European Countries, 1950.

G. Sadoul, Histoire du Cinéma, 1949, 1963.

印南高一, 映画社会学, 昭和30年.

山田宗睦編, コミュニケーションの社会学, 福武・日高監修, 現代社会学講座IV, 昭和38年.

中井正一全集, 美術出版社, 昭和39年.

(31) G. A. Huaco, The Sociology of Film Art, 1965.

(32) G. A. Huaco, op. cit., p. 18.

(33) G. A. Huaco, op. cit., p. 19.

(34) G. A. Huaco, ibid. p. 19.

戦争が, 芸術に対して及ぼす影響については, P. A. Sorokin の見解も参考となる.

P. A. Sorokin, Contemporary Sociological Theories, 1928, pp. 349-352, *The Influence of War on Science and Arts.*

(35) G. A. Huaco, op. cit., p. 21.

(36) J. Bab, Das Theater im Lichte der Soziologie, 1931.

(37) 劇場組織については, 次の文献も参考となる.

P. V. Tieghem, Technique du Théâtre, 1960, ヴァン・ティエーグム, 石沢秀二訳, 芝居はどうしてつくられるか, 昭和36年.

(38) M. Weber, Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik, 1921.

(39) A. Silbermann. The Sociology of Music, 1963.

(40) A. Silbermann, op. cit., pp. 60-62.

(41) 我国における建築社会学の研究として, 佐原六郎教授の塔の研究を挙げたい.

塔の世界, 昭和17年

塔の研究, 昭和24年

世界の古塔, 昭和38年

サクソン塔とその社会的背景, 哲学, 第38集, 昭和35年.

(42) A. von Martin, op. cit., p. 26.

(43) 芸術社会学のこれまでの研究において, マルクス主義芸術理論の与えた影響をみのがすことはできないが, マルクス主義芸術理論に立脚する研究が, 芸術社会学研究の主流をしめてきたと即断することは, さげたい.

K. Marx, F. Engels の芸術論を, この場合, まず検討しなければならない. さらに, G. V. Plekhanov, V. M. Friche, A. V. Lunacharskii, W. Hausenstein, G. Lukács などの研究業績を考察する必要があるだろう.

### 3 芸術社会学の領域と性格

社会学の領域で芸術を研究する場合、シンボルおよびコミュニケーションを視点として考察することも有意義である。E. Cassirer の言葉を使えば、人間はシンボルを操る動物 (animal symbolicum) である。<sup>(1)</sup> この見解に立てば、芸術社会学は、サイン・シンボルの社会学に入るものとも考えられるし、また、コミュニケーションの研究を通して芸術社会学の諸問題を考察することもできる。<sup>(2)</sup> さらに文化社会学との関連において芸術社会学を考えてみたい。しかし、芸術社会学の研究の系譜をたどってみると、それらの研究が、文学、音楽、絵画、映画、演劇、建築のいずれかの種類に重点をおいていることが明らかとなる。だから、芸術社会学は、まず文学、音楽、絵画などの個別的芸術社会学としても発達してきた。前項において文学、絵画、映画、音楽などの社会学についての考察を試みたのもこれがためである。しかし、これからの芸術社会学は、芸術の種類に対応したこれらの個別研究を比較検討し、その間に認められる共通点を総合することによって築かれるものと考えられる。したがって芸術社会学の一般理論の構成には、先ず第一にこのような個別的芸術社会学の研究を積極的に進めていくことが必要である。

いずれにせよ、芸術社会学の研究は、まだ胎生期を出ないのである。社会学の研究領域のなかでも、この方面の研究は、他の領域に比較して、決して進んでいるとはいえない。むしろ、芸術社会学の研究は、今後の開拓に委ねられているというべきである。<sup>(3)</sup> まだ未開拓、未整理の問題の多く残る芸術社会学の研究を進めることは、社会学における文化の研究をより精緻なものとするためにも、さらに文化構造、文化変動との関連において社会構造、社会変動を考察し、社会、文化、個人の相互関係をダイナミックにとらえるためにも、重要な課題である。芸術社会学は、社会学と美学の接点に位置するのでもなければ、社会学と美学の融合する領域にあるも

のでもない。芸術社会学は、文化社会学の領域に入り、しかも、社会学理論と深く結びつく社会学の研究である。だから、芸術社会学の研究は、社会学理論の諸問題の考察に対して寄与できるものでなければならない。行動、社会関係、地位、役割、社会集団、制度、社会体制、階級、階層、規範、文化などの視点で、芸術の研究をおこなうことは、とりもなおさず、芸術の構造、機能、様式の研究を媒介として、社会構造、社会変動、文化構造、文化変動の諸理論を研究することにほかならないのである。<sup>(4)</sup>

芸術社会学の研究を進める場合には、特に次のような研究者の業績を検討しながら、吸収すべきところをとり入れて行く必要がある。年代順に挙げれば、それらの研究としては、A. Comte, H. Spencer, L. F. Ward, J. G. Tarde, V. Pareto, F. H. Giddings, F. Tönnies, T. B. Veblen, G. Simmel, E. Durkheim, M. Weber, A. Weber, M. Scheler, F. Znaniecki, P. A. Sorokin, R. Mukerjee, K. Mannheim, G. Gurvitch, T. Parsons などの研究が挙げられる。これらの研究者の多くは、その社会学研究において、芸術に関する考察を試みているのである。社会学者による芸術の考察を年代順に編成して芸術社会学の系譜を作成すれば、これらの研究者の研究をこの系譜に位置づけることができる。さらに芸術社会学の系譜を完成させるためには、文化人類学、社会心理学、精神分析学、哲学、美学、美術史学、芸術心理学、民族心理学、言語学などの研究業績をこの系譜に加えなければならない。芸術社会学のこれまでの研究は、これら諸領域の研究との深いつながりにおいて、進められてきたのである。<sup>(5)</sup>

T. Parsons の研究においては、芸術は、cultural system, expressive symbolism の問題として扱われる。さらに芸術は、いわゆる I G A L 図式の L (潜在的なパターンの維持および緊張の処理) 部分において問題となる。いいかえれば、芸術は、文化の、および動機づけの体系 (cultural-motivational system) という社会の分化した下位体系に入るものとみられるのである。また、彼は、芸術家の役割という点から、創造的芸術家

(creative artist), 実行的芸術家 (performing artist) という二つのタイプを分類した。創造的芸術家とは、表現的シンボルの新しい型の制作を専門とする者であり、実行的芸術家とは、行為の文脈においてこのようなシンボルの熟練した実行を専門とする者をさすのである。<sup>(6)</sup>

さて、芸術家をめぐる芸術社会学の問題には、どのようなものがあるか。これを要約すれば、次のようになるだろう。(1) 芸術家の社会的地位は、時代によりどのようにかわったか。<sup>(7)</sup> (2) 芸術家は、どのような役割を担っているか。(3) 芸術家としてし独立するまでにたどった過程は、どのようなものか。<sup>(8)</sup> (4) 芸術家と限界人 (marginal man) とアウトサイダーについて。<sup>(9)</sup> (5) 芸術家の集団について。なお、このほかにも多くの問題が残されている。芸術行動を考える場合には、V. Pareto の論理的行動と非論理的行動の所説や M. Weber の所説も参考となる。これらの点については改めて考察を試みたい。芸術が、社会学の理論のどのような点と交叉するか、ということを考えてみなければならない。

芸術社会学の比較的まとまった業績としては、R. Mukerjee の研究に注目したい。<sup>(10)</sup> なお、A. Hauser や P. A. Sorokin の研究も、この分野での代表的な研究であろう。P. A. Sorokin の研究では、美術の主要な形式の動態的分析が注目される。<sup>(11)</sup> 彼は、sensate art, ideational art, idealistic art を主要な三形式とみとめ、これらの変遷について研究を進めたが、これは、芸術社会学が、社会・文化変動の理論に寄与できる可能性を示すものである。彼はまた、第四の形式として、eclectic art を挙げたのである。

D. W. Gotshalk の芸術社会学研究の要点は次のようにまとめることができる。<sup>(12)</sup> (1) 芸術は、どんな形態であらわれようと、芸術がうみ出された社会の精神と時代をあらわすものである。(2) 芸術は、一つの過程であり、芸術は、芸術家と芸術家が生活している社会との相互作用の所産である。(3) 芸術には、美的機能と非美的機能がみられる。芸術の非美的機能は、成功、富、名声、威光、社会的権力などに関連するのである。

ところで、R. Mukerjee によると、芸術社会学の領域には、芸術の形式及び主題の社会関係という問題が入るのである。芸術活動は、規範及び価値の感情により支配されているが、他方、個人的な創造的表現としての芸術は、社会的価値を明らかにし、またある程度、社会的価値をつくりなおし、それを決定する。芸術は、人間の熱望と経験の一つの表出であるが、かかる芸術は、価値の機構、集合的生活の一般的な型および人々の文化の中に織込まれているのである。芸術は、また社会の主要な思考過程、価値、理想を改造する。彼によれば、芸術社会学は、芸術作品の客観的研究であり、この場合、作品は、人間の個人的な努力と目的達成および独自の価値観の表現であり、主要な社会的価値のコミュニケーションの媒体であるとともにある時代や文化の記録であるとみなされる。芸術社会学は、芸術作品の感覚的価値や、日付、題名、などを直接問題とするのではなく、芸術作品の起源及び機能に関する社会的状況、芸術の形式を決定し、主としてその動機や主題を条件づける、地域的、経済的、社会的な要因と力の背景、及び一定の文化の中でしめる芸術の意味を問題とするのである。<sup>(13)</sup> 彼は、芸術社会学は、社会における芸術の意味、機能、有機的位置を明らかにすると述べている。<sup>(14)</sup> そして、芸術を社会的所産という角度でとらえるとともに社会統制の機能を芸術に認めているのである。<sup>(15)</sup> さらに芸術社会学の研究においては、次の諸問題の分析が要求される。(1) 芸術家の社会的背景とイデオロギーの背景、(2) 個々の芸術家の独創的な、あるいは新しい業績と芸術の伝統、(3) 明確な社会的歴史的背景との関連における芸術の形式、動機、主題、(4) 芸術対象 (art object) の受容と拒絶。<sup>(16)</sup> 以上が R. Mukerjee の所説の要点である。

文学の領域で芸術社会学の研究を進めている H. D. Duncan によると、文学は、作家がある期待された目的に対してシンボル—言葉—を意識的に操作して、現実の世界と仮構の世界 (world of make-believe) とを劇的に情緒的に描く芸術とみなされ、さらに文学を魔術的芸術とみて、政治家や



支配者の説得力と集団行動の例を挙げている。文学が仮構の世界を描く芸術であるということは、文学が、現実の世界からの逃避の手段となることを意味し、したがって、文学は、社会成員の抑圧が社会的に認められた方法で解放される手段としての機能を果すのである。作家は、集団の希望や恐怖を体現する幻想の世界を構築するのである。また、作家は標準的形式、つまり、文法、きまり文句、筋、状況の諸規則に従うという点で、文学は一つの社会制度であると彼はみる。H. D. Duncan はシンボルの説得的機能および権威に対するシンボルの関係を含む文学研究のための社会学的な枠組を示唆している。<sup>(17)</sup>

J. H. Barnett は、芸術の社会学的研究は、社会的相互作用の本質、集合体の形成と維持、文化変動の仕方、社会的コミュニケーション過程などの理解において社会学の問題解決に貢献するという。彼は芸術過程 (art process) に焦点を合せて芸術社会学の諸問題を探索しているが、この芸術過程とは、芸術家、作品、享受者を要素とする過程である。これらの過程を通して彼は芸術家の活動、役割、公衆と批評家、芸術家、芸術における模倣と独創、マス・メディアと芸術などにわたる考察を試みている。批評家は、いわば、taste leader として行動するのである。<sup>(18)</sup>

ところで、H. D. Duncan の研究によると、社会制度としての芸術の構造分析が、芸術社会学の課題であるとみられる。このような芸術の構造分析は、芸術の機能の分析と密接に結びつくのである。社会における芸術の制度的構造は、芸術家、批評家、公衆の間にみられる相互作用の形式を媒介として分析される。この構造分析の場合、最も重要な要素を、彼は批評である、と述べている。そして、芸術家、批評家、公衆は、それぞれが、他の二者との関係において行動し、芸術家と批評家、批評家と公衆、芸術家と公衆の相互関係には、関係の強弱の度合が識別されるとみて、芸術の制度的構造に関する五種類の図式を描いたのである。<sup>(19)</sup>

A. Silbermann によると、芸術社会学は次のような諸問題を研究するの

である。第一に芸術社会学は、人間の社会生活の一つの相としての芸術を因果的にまた目的的に理解する。第二に芸術社会学は、特殊な社会集団と芸術的活動の本質的な形式について研究をすすめる、第三に芸術が人間関係の中間地点に位置するという理由で、次のような諸問題を取扱うのである。(a) 人間の社会生活に対する芸術の作用の研究、(b) 集団形成、集団関係、集団闘争等に対する芸術の影響の研究、(c) 芸術を通じて条件づけられた社会的態度及び型の発達と多様性の研究、(d) 社会・芸術的諸制度 (sozio-künstlerischer Institutionen) の形成、成長、没落の研究、(e) 諸芸術の影響をうけるさまざまな社会組織の典型的な要素と形式の研究、そして第四に芸術社会学は、芸術と社会の相互関係として、社会的な活動である芸術のたえず変化する生成の過程をあつかうのである。<sup>(20)</sup> だから、要約すれば、芸術社会学の第一の目的は、さまざまな表現形式 (演劇、文学、音楽、絵画など) をとる社会現象としての芸術のダイナミックな性格を具体的に説明することである (A. Silbermann) ということもできる。<sup>(21)</sup>

ところで、P. Frankstel は、次のような六つの領域を分けながら、芸術社会学のためのプログラムを構成した。この案によると、第一は、芸術家と作品の享受者の関係を分析する文明の類型および集団の社会学であり、第二は、文明の美的対象たる作品の社会学である。第三に彼が挙げたのは、表現 (expression) 方法と象徴的对象の社会学であった。このほか、彼は、表出 (présentation) 様式の社会学、比較芸術社会学 (sociologie artistique comparée, サインとシンボルを対象とする)、産業社会における芸術の社会学をそのプログラムに加えているのである。<sup>(22)</sup>

一方 A. Memmi は、文学社会学について研究をおこなっているが、そこで中心となるものは、作者—作品—公衆 (Auteur Œuvre Public) という関係で、作品については、形式と様式の社会学、主題の社会学、作中人物と性格の社会学を分け、作者については、経済、職業、社会階級、世代の視点からの考察を試みている。<sup>(23)</sup> このように芸術社会学の研究を比較して

みると、共通した問題点がみられるようである。

本稿の目的は、芸術社会学の諸問題を発掘しながら、芸術社会学の系譜をたどり、社会学の研究領域のなかで芸術社会学が、どのような位置をしめるかを考察することであった。ここでは、これらの点について詳細に論ずる余裕がないため、氷山の一角に触れたにすぎないが、以上において提出した問題点について、これから順次考察を試みたい。さしあたり、次の稿では、「社会学理論と芸術社会学」という主題で、社会学理論と芸術社会学の諸問題の関連性を考察する予定である。

芸術社会学の研究主題は何か、という問に対しては、私は次のような解答を与えることにしよう。

芸術社会学の研究主題は、芸術の社会構造、芸術の社会的機能および芸術様式である。いいかえれば、社会行動、社会関係、社会集団、社会体制、文化との関連において、芸術の諸問題を追求することが、芸術社会学の目標といえるだろう。それゆえ、芸術社会学の性格を次のように要約できる。

芸術社会学は、芸術の社会構造、社会的機能、様式の分析をとおして、社会構造、社会変動、文化構造、文化変動の相互関係を考察し、社会、文化、個人に関する体系的理論を構成する科学である。 (1966年1月)

(1) E. Cassirer, *An Essay on Man*, カッシーラー, 宮城音弥訳。人間, 昭和28年, 37頁。

(2) シンボルに関しては、＜深さの社会学＞を提唱した G. Gurvitch の所説にも注目したい。同様に社会学者や文化人類学者もそれぞれの立場からシンボルに関する研究を進めている。言語学者については、いうまでもない。

L. A. White, *The Science of Culture*, 1949, pp. 22-39. *The Symbol*.

(3) 特に我国では、芸術社会学の体系的研究は、これまで、ほとんどみられなかったといってよい。日本における芸術社会学研究の系譜については、別の機会に論じたい。

(4) 芸術家は、社会的緊張を大衆より素早く感じとり、社会・文化変動の始動期をとらえ、作品を制作し、人々に対し大きな影響力を及ぼす場合がある、とい

う考え方は、芸術社会学の研究者が、よく論ずることである。

- (5) 芸術社会学の系譜については、A. Silberman, H. D. Duncan, J. H. Barnett の研究におけるとらえ方が参考となる。いずれも、共通する点がある。  
A. Silberman, *Kunst*, René Köning, Soziologie, 1958, pp.156-166.  
H. D. Duncan, op. cit.  
J. H. Barnett, op. cit.
- (6) T. Parsons. *The Social System*, pp.408-414, *The Role of the Artist*, 1952.
- (7) ルネッサンス以降のヨーロッパでは、次のような一般的な説明をすることができるかもしれない。芸術家が特定のパトロンに従って、注文生産のかたちで、いわば職人として作品を制作していた状態から脱して、芸術家として独立し、市場を対象にして作品を制作するようになることと並行して、パトロンは、芸術家の擁護者から作品の蒐集家にかわり、一方では、享受者として市民が登場し、市場の開発にともない画商が現われ、やがて taste leader としての批評家が登場してくるのである。芸術家の地位と役割は、時代と場所とにより異なる。展覧会、オークション、美術アカデミー、芸術団体の歴史と機能も、芸術社会学の取組まなければならない重要な研究課題である。これらは、政治・経済体制との関連において考察することができる。
- (8) 中世・ルネッサンスの画家は、工房に徒弟として入り、職人となり、遍歴時代を終えてから画家の同業組合（ギルド）である聖ルカ組合に作品を提出し、師匠としての資格をこの組合によって認められると、組合への加入を許され、初めて一本だちの画家一師匠となった。
- (9) 品川清治、限界人とアウトサイダー、甲南大学文学会論集、第27号、昭和40年。
- (10) R. Mukerjee, *The Social Function of Art*, 1954. R. Mukerjee の社会学説については、次の文献を参照せよ。  
E. S. Bogardus, *The Development of Social Thought*, pp. 631-645, chapter XL, *Mukerjee and Social Values*, 4th ed., 1960.
- (11) P. A. Sorokin, *Social and Cultural Dynamics*, 4 vols., 1937-41; *Society, Culture, and Personality: their structure and dynamics*, 1947; *Historical and Social Philosophies* (formerly titled: *Social Philosophies of an Age of Crisis*, 1950), 1963.
- (12) D. W. Gotshalk, *Art and the Social Order*, 1947.
- (13) R. Mukerjee, op. cit., pp. 30-31.
- (14) R. Mukerjee, op. cit., p. 2 introduction.

- (15) R. Mukerjee. op. cit., p. 4, x, xxi.
- (16) R. Mukerjee, op. cit., p. 37.
- (17) H. D. Duncan, *Language and Literature in Society*, 1953.
- (18) J. Barnett, *The Sociology of Art*, edited by R. K. Merton, *Sociology of Today*, pp. 197-214, 1959.
- (19) H. D. Duncan, *Sociology of Art, Literature and Music: social contexts of symbolic experience*, edited by H. Becker & A. Boskoff, *Modern Sociological Theory*, pp. 482-497.
- (20) A. Silbermann, *Kunst*, René Köning, *Sociologie*, pp. 165-166, 1958.
- (21) A. Silbermann, op. cit. p. 156.
- (22) P. Francastel, *Problèmes de la sociologie de l'art*, G. Gurvitch, *Traité de sociologie*, pp. 278-296, 1960.
- (23) A. Memmi, *Problèmes de la sociologie de la littérature*, G. Gurvitch, *Traité de Sociologie*, pp. 299-314, 1960.

### 〈参考文献〉

- ※Adorno, T. W. & Dirks, W., *Kunst-und Musiksoziologie*, Soziologische Exkurse, Frankfurter Beiträge zur Soziologie, Band 4, pp 93-105, Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt, 1956.
- Aldrich, V. C., *Philosophy of Art*, Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, Inc., 1963.
- Allen, P. J. edit., Pitirim A. Sorokin in Review, Durham: N. C.: Duke Univ. Press, 1963.
- ※Bab, J., *Das Theater im Lichte der Soziologie—Soziologie des Theaters—*, 「演劇社会学」千賀彰訳, 大畑書店, 昭和9年.
- ※Barnett, J. H., *The Sociology of Art*, edit. by Merton, R.K., Broom, L. and Cottrell, Jr. L. S., *Sociology Today*, pp 197-214, New York: Basic Books, Inc., 1959.
- Benedict, R., *Patterns of Culture*, (A Mental Book) The New American Library, 1946.
- Berenson, B., *Italian Painters of the Renaissance*, Phaidon Press Ltd., 1952, 「ルネッサンスのイタリア画家」監修矢代幸雄・山田智三郎他訳, 新潮社, 昭和36年.

- Boas, F., *Race, Language and Culture*, New York: Macmillan Co., 1940.
- ※——, *Primitive Art*, New York: Capitol Publishing Company, Inc., 1951.
- Bogardus, E. S., *The Development of Social Thought*, New York, London, Toronto: Longmans, Green and Co., 1940.
- ※Bonnot, R., *Sociologie de la musique*, G. Gurvitch, *Traité de sociologie*, pp 297-298, Paris: Presses Universitaires de France, 1960.
- ※Bruford, W. H., *Chekhov and His Russia—A Sociological Study—*, London: Kegan Paul, Trench, Trubner & Co., Ltd., 1947.
- ※Bücher, K., *Arbeit und Rhythmus*, Leipzig: Hirzel, 1896.
- ※Burke, K., *The Philosophy of Literary Form—Studies in Symbolic Action—*, Baton Rouge, La.: Louisiana State Univ. Press, 1941.
- , *A Grammar of Motives*, New York: Prentice-Hall, 1945.
- ※Cassirer, E., *An Essay on Man—An Introduction to a Philosophy of Human Culture—*, New Haven: Yale Univ. Press, 1944, 「人間」宮城音弥訳, 岩波現代叢書, 1953年.
- , *The Philosophy of Symbolic Forms*, New Haven: Yale Univ. Press, 1953-1955.
- Comte, A., *Cours de philosophie positive*, 6 vols. Paris: Bachelier, 1830-1842.
- Cooley, C. H., *Human Nature and the Social Order*, New York: Scribner's, 1902.
- ※Coser, L. A. edit., *Sociology through Literature—An Introductory Reader—*, Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1963.
- ※——, *Men of Ideas—A Sociologist's View—*, New York: The Free Press, 1965.
- Cowell, F. R., *History Civilization and Culture—An Introduction to the Historical and Social Philosophy of Pitirim A. Sorokin—*, London: Adam and Charles Black, 1952.
- Cuber, J. F., Kenkel, W. F. and Harper, R. A., *Problems of American Society—Value in Conflict—*, New York: Holt, Rinehart and Winston, Inc., 4th edit. 1964.
- ※Dewey, J., *Art as Experience*, New York: G. P. Putnam's Sons, 1934.
- ※Dvořák, M., *Kunstgeschichte als Geistesgeschichte*, 1928, 「精神史としての美術史」中村茂夫訳, 全国書房, 昭和21年.

- ※Duncan, H. D., *Sociology of Art, Literature and Music—Social Contexts of Symbolic Experience*—, edit. by Becker, H. & Boskoff, A., *Modern Sociological Theory in Continuity and Change*, New York: The Dryden Press, 1957.
- ※——, *Language and Literature in Society—A Sociological Essay on Theory and Method in the Interpretation of Linguistic Symbols, with a Bibliographical Guide to the Sociology of Literature*—, New York: The Bedminster Press, 1961.
- ※——, *Communication and Social Order*, New York: The Bedminster Press, 1962.
- Durkheim, E., *De la division du travail social*, Paris: Alcan, 1893.
- ※Duvignaud, J., *Problème de sociologie de la sociologie des arts*, 〈Cahiers internationaux de sociologie〉 26, janv.-juin, pp.137-148, 1959.
- ※——, *Sociologie du théâtre—Essai sur les ombres collectives*—, Presses Universitaires de France, 1965.
- ※Escarpit, R., *Sociologie de la littérature*, 《Que sais-je ?》, 1958, 「文学の社会学」大塚幸男訳, 文庫クセジュ, 白水社, 1959.
- ※Fedele, P. B., *Aspetti Sociali dei Canti D'Amore e del Lavarò in Minturno (Latina-Italia)*, herausgegeben im Auftrage von Herrn Prof. Dr. Hans Freyer, Akten des xviii. Internationalen Soziologenkongresses (Nürnberg, 10. bis 17. September 1958), Verlag Anton Hain KG. Meisenheim Am Glan, 1962.
- Freud, S., *Das Unbehagen in der Kultur*, Wien: Internationaler Psychoanalytischer Verlag, 1930.
- , *The Ego and the Id* (trans. Riviere, J.), London: Hogarth Press, 1950.
- ※Francastel, P., *Problèmes de la sociologie de l'art*, G. Gurvitch, *Traité de sociologie*, pp.278-296, Paris: Presses Universitaires de France, 1960.
- ※Fritche, V. M., 「芸術社会学の諸問題」黒田辰男訳, 往来社, 昭和7年.
- ※——, 「芸術社会学」昇曙夢訳, 創元文庫, 昭和27年.
- Gillin, J. L. & Gillin, J. P., *Cultural Sociology—A Revision of An Introduction to Sociology*, New York: The Macmillan Company, 1942.
- ※Gotshalk, D. W., *Art and the Social Order*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1947.
- ※Granai, G., *Problèmes de la sociologie du langage*, G. Gurvitch, *Traité*

- de sociologie, pp 255-277, Paris: Presses Universitaires de France, 1960.
- ※Grosse, E., *The Beginnings of Art*, New York & London: D. Appleton & Company, 1914.
- Gurvitch, G., *Déterminismes sociaux et liberté humaine—Vers l'étude sociologique des cheminements de la liberté—*, Paris: Presses Universitaires de France, 1955.
- Gutkind, E. A., *International History of City Development*, volume 1, *Urban Development in Central Europe*, London: The Free Press of Glencoe Collier-Macmillan Limited, 1964.
- ※Guyau, J. M., *L'art au point de vue sociologique*, 「社会学上より見たる芸術」大西克礼, 小方庸正訳, 岩波文庫, 全3巻, 昭和5-6年.
- ※Haag, W. G., *The Artist as a Reflection of His Culture*, edit. by Dole, G. E. & Carneiro, R. L., *Essays in the Science of Culture—In Honor of Leslie A. White*, pp 216-230, New York: Thomas Y. Crowell Company, 1960.
- ※Harrison, J. E., *Ancient Art and Ritual*, Home Univ. Library, 1913, 「古代芸術と祭式」佐々木理訳, 筑摩叢書, 1964.
- ※Hausenstein, W., *Die Kunst und die Gesellschaft*, München: R. Piper & Verlag, 1916.
- ※Hauser, A., *Ziele und Grenzen der Soziologie der Kunst*, *Frankfurter Beiträge zur Soziologie*, Band 1, *Sociologica*, pp 387-398, Frankfurt am Main: Europäische Verlagsanstalt, 1955.
- ※——, *The Philosophy of Art History*, New York: A. A. Knopf, 1959.
- ※——, *The Social History of Art*, 4 vols, (trans. with the Author by S. Godman), London: Routledge & Kegan Paul, 1962, 「芸術の歴史」高橋義孝訳, 全3巻, 平凡社, 1958.
- ※Hayakawa, S. I., *Language in Thought and Action*, New York: Harcourt, Brace, 1949, 「思考と行動における言語」第2版, 大久保忠利訳, 岩波現代叢書, 1965.
- Heyl, B. C., *New Bearings in Esthetics and Art Criticism*, New Haven: Yale Univ. Press, 1943.
- ※Hirn, Y., *The Origin of Art*, 1900.
- Howell, A. R., *The Meaning and Purpose of Art or the Making of Life*, Ditchling, Sussex, England: The Ditchling Press Limited, 2nd edit.



1957.

※Huaco, G. A., *The Sociology of Film Art*, New York, London: Basic Books, Inc., 1965.

※Huisman, D., *L'esthétique, 《Que sais-je ?》*, 1954, 「美学」久保伊平治訳, 文庫クセジュ, 白水社, 1959.

※Huizinga, J., *Homo Ludens—Vom Ursprung der Kultur im Spiel*, Hamburg: Rowohlt Verlag, 1956, 「遊戯—人類文化と遊戯—」高橋英夫訳, 中央公論社, 1963.

※Jones, C. R., *The Sociology of Symbols, Language and Semantics*, edit. by Roucek, J. S., *Readings in Contemporary American Sociology*, pp 437-452, Paterson, New Jersey: Littlefield, Adams & Co., 1961.

Klingender, F. D., *Art and the Industrial Revolution*, London: Noel Carrington, 1947.

Kroeber, A. L., *The Nature of Culture*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1952.

※——, *Style and Civilizations*, Ithaca, New York: Cornell Univ. Press, 1957.

—— & Kluckhohn, C., *Culture—A Critical Review of Concepts and Definitions*, New York: Vintage Books, 1963.

※Lalo, C., *L'art et la vie sociale*, Paris: Doin, 1921, 「芸術と社会生活」田部節訳, 改造社, 昭和11年.

※Langer, S. K., *Philosophy in a New Key*, New York: Penguin Books, 1948, 「シンボルの哲学」矢野他訳, 岩波現代叢書, 1960.

Linton, L., *The Study of Man*, New York: Appleton, 1940.

——, *The Tree of Culture*, New York: Knopf, 1955.

※Lowenthal, L., *The Sociology of Literature*, edit. by Schramm, W., *Communication in Modern Society*, pp 83-100, Univ. of Illinois Press, 1948.

※——, *Literature and the Image of Man—Sociological Studies of the European Drama and Novel—*, Boston: Beacon Press, 1957.

※Lukács, G., *Thomas Mann*, Berlin: Aufbau-Verlag, 1950, 「病める芸術か 健康な芸術か」片岡啓治訳, 現代思潮社, 昭和35年.

Maletzke, G., *Psychologie der Massenkommunikation—Theorie und Systematik—*, Hamburg: Verlag Hans Bredow-Institut, 1963, 「マス・コミュニケーション心理学」NHK 放送学研究室訳, 昭和40年.

- Malinowski, B., *A Scientific Theory of Culture and Other Essays*, The Univ. of North Carolina Press, 1944, 「文化の科学的理論」 姫岡他訳, 岩波書店, 1958年.
- Mannheim, K., *Ideology and Utopia*, (trans. by Wirth, L. & Shils, E.) New York: Harcourt, Brace, 1936.
- , *Essays on the Sociology of Knowledge*, (trans. by Mannheim, E.), New York: Oxford Univ. Press, 1952.
- ※—, *Essays on the Sociology of Culture*, London: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1956.
- Marquet, J. J., *The Sociology of Knowledge*, Boston: The Beacon Press, 1951.
- ※Martin, A. von, *Sociology of Renaissance*, (trans. by Luetkens, W. L.), New York and Evanston: Harper & Row, Publishers, 1963.
- Martindale, D., *Social Life and Cultural Change*, Princeton, New Jersey: D. Van Nostrand Company, Inc., 1962.
- ※Marx, K. & Engels, F., *Über Kunst und Literatur—Eine Sammlung aus ihren Schriften*, herausgegeben von Lifschitz mit einem Vorwort von Erpenbeck, F., Berlin: Henschelverlag, 1953, 「マルクス・エンゲルス芸術論」 滝崎安之助訳, 岩波書店, 昭和32年.
- Mead, G. H., *Mind, Self and Society*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1934.
- Meier, N. C., *Art in Human Affairs—An Introduction to the Psychology of Art*, New York: McGraw-Hill Book Company, 1942.
- ※Memmi, A., *Cinq propositions pour une sociologie de la littérature*, (Cahiers internationaux de sociologie), 26, janv.-juin, pp 149-159, 1959.
- ※—, *Problèmes de la sociologie de la littérature*, Gurvitch G., *Traité de sociologie*, pp 299-314, Paris: Presses Universitaires de France, 1960.
- Merton, R. K., *Social Theory and Social Structure*, Glencoe, Ill.: The Free Press, 1949.
- ※Mukerjee, R., *The Social Function of Art*, New York: Philosophical Library, 1954.
- Mumford, L., *The Culture of Cities*, New York: Harcourt, Brace and Company, 1938.
- ※—, *Art and Technics*, Columbia Univ. Press, 1952, 「芸術と技術」 生田勉訳,

- 岩波新書，昭和29年。
- ，*The Condition of Man*, London: (Mercury Books) The Heimann Group of Publishers, 1963.
- Newton, E., *The Arts of Man*, Thames and Hudson, 1960.
- Ogburn, W. F., *Social Change—with Respect to Culture and Original Nature—*, Gloucester, Mass.: Peter Smith, 1964.
- Ogden, C. K. & Richards, I. A., *The Meaning of Meaning*, New York: Harcourt, Brace, 1946.
- Pareto, V., *The Mind and Society—A Treatise on General Sociology* (Four volumes bound as two), trans. by Bongiorno, A. & Livingston, A., edit. by Livingston, A., New York: Dover Publications, Inc., 1963.
- ※Parsons, T. & Shils, E. A. edit., *Toward a General Theory of Action—Theoretical Foundations for the Social Science—*, New York & Evanston: Harper & Row, Publishers, 1962.
- ※Parsons, T., *The Social System*, The Free Press of Glencoe, fifth printing, 1964.
- , Shils, E., Naegle, K. D., and Pitts J. R., *Theories of Society—Foundations of Modern Sociological Theory—*, New York: The Free Press, one volume edition. 1965.
- Peosner, N., *Pioneers of Modern Design—From William Morris to Walter Gropius—*, New York: Museum of Modern Art, 1949, 「モダンデザインの展開—モリスからグロピウスまで—」白石博三訳，みすず書房，昭和32年。
- ※Plekhanov, G. V., 「階級社会の芸術」蔵原惟人訳，三笠文庫，昭和27年；「芸術と社会生活」蔵原惟人，江川卓訳，岩波文庫，昭和40年。
- ※Pollins, H., *Sociological Aspects of Anglo-Jewish Literature*, <Jewish Journal of Sociology> (London), 2, (1), pp 25-41, 1960.
- ※Rama, C. M., *La Enseñanza de la Sociología en las Facultades de Arquitectura*, Akten des XVIII. Internationalen Soziologenkongresses, pp 302-308, Verlag Anton Hain KG. Meisenheim Am Glan, 1962.
- ※Read, H., *Art and Society*, London: Faber and Faber, 3 edit., 1947.
- , *Art Now—An Introduction to the Theory of Modern Painting and Sculpture*, London: Faber and Faber, rev. edit., 1948.
- , *The Meaning of Art*, London: Faber and Faber, 1951.
- , *Icon and Idea—The Function of Art in the Development of Human*

- Consciousness, London: Faber and Faber, 1955.
- Riggs, A. F., Play—Recreation in a Balanced Life—, New York: Doubleday & Company, 1953.
- ※Rosenberg, B. & White, D. M. edit., Mass Culture—The Popular Arts in America, New York: The Free Press of Glencoe, 1964.
- Rothschild, L., Style in Art—The Dynamics of Art as Cultural Expression—, New York: T. Yoseloff, 1960.
- Roucek, J. S. edit., Social Control, New York: D. Van Nostrand and Company, 1947.
- Santayana, G., The Sence of Beauty, New York: Charles Scribner's Sons, 1896.
- Sapir, E., Language, New York: Harcourt, 1921.
- , Selected Writings in Language, Culture and Personality, edit. by Mandelbaum, D. G., Berkeley: Univ. of California Press, 1949.
- Saussure, F. de, Cours de linguistique générale, Paris: Payot et Cie, 2 edit., 1922, 「言語学原論」小林英夫訳, 岩波書店, 昭和15年.
- ※Schücking, L. L., The Sociology of Literary Taste, trans. by Dickes, E. W., London: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1944.
- ※Silbermann, A., *Kunst*, René König, Soziologie, Frankfurt am Main: Fischer Bücherei KG., 1958.
- ※—, The Sociology of Music, trans. by Stewart, C., London: Routledge & Kegan Paul Ltd., 1963.
- Simmel, G., Philosophische Kultur, Leipzig: Kröner, 1911.
- , Zur Philosophie der Kunst, Potsdam: Kiepenheuer, 1922.
- Sorokin, P. A., Contemporary Sociological Theories, New York & London: Harper & Brothers, 1928.
- ※—, Social and Cultural Dynamics, 4 vols., New York: American Book Co., 1937-41.
- ※—, Society, Culture, and Personality—Their Structure and Dynamics—A System of General Sociology—, New York: Cooper Square Publishers, Inc., 1962.
- , Modern Historical and Social Philosophies, (formerly titled: Social Philosophies of an Age of Crisis, 1950, Boston: Beacon Press), New York: Dover Publications, Inc., 1963.

- Spencer, H., *A System of Synthetic Philosophy*, 10 vols., London: Appleton, 1862-1896.
- , *Philosophy of Style*, London: Appleton, 1871.
- ※Taine, H., *Philosophie de l'art*, 「芸術哲学」広瀬哲士訳, 東京堂, 昭和12年.
- ※Tolstoy, L., *What is Art?*, New York: Oxford Univ. Press, 1932, 「芸術とは何か」河野与一訳, 岩波文庫, 昭和9年.
- Tönnies, F., *Gemeinschaft und Gesellschaft—Grundbegriffe der Reinen Soziologie*, 1887, 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフト—純粹社会学の基本概念—」杉之原寿一訳, 岩波文庫2巻, 昭和32年.
- Veblen, T., *The Theory of the Leisure Class*, New York: Macmillan, 1899.
- ※Weber, A., *Prinzipien der Geschichts—und Kultursoziologie*, München: Piper, 1951.
- ※Weber, M., *Soziologie der Musik—Die rationalen und soziologischen Grundlagen der Musik—*, München: Drei Masken Verlag, 2 edit. 1924, (*Rational and Social Foundations of Music*, edit. & trans. by Riedel, J. & Martindale, D., Carbondale, Ill.: Southern Illinois Univ. Press, 1958), 「音楽社会学」山根銀二訳, 有斐閣, 昭和29年.
- , *Wirtschaft und Gesellschaft—Grundriss der Verstehenden Soziologie*, 4 edit., Tübingen: J. C. B. Mohr, 1956.
- White, L. A., *The Science of Culture—A Study of Man and Civilization—*, New York: Farrar and Straus, 1949.
- ※Wind, E., *Art and Anarchy*, London: Faber and Faber Ltd., 1963, 「芸術と狂気」高階秀爾訳, 岩波書店, 昭和40年.
- Wundt, W., *Elements of Folk Psychology*, trans. by Schaub, E. S., London: Allen and Unwin, 1928.
- ※Young, K., *Sociology—A Study of Society and Culture—*, New York: American Book Company, 1942.
- Znaniecki, F., *Cultural Reality*, Chicago: Univ. of Chicago Press, 1919.
- , *The Method of Sociology*, New York: Rinehart & Company, Inc., 1934.
- ※——, *The Social Role of the Man of Knowledge*, New York: Octagon Books, Inc., Reprinted 1965.
- , *Social Relation and Social Roles—The Unfinished Systematic Sociology*, San Francisco: Chandler Publishing Company, 1965.

江上波夫, 美術の誕生, 東京大学出版会, 1965年.

土方定一, 画家と画商と蒐集家, (岩波新書) 岩波書店, 1963年.

本田喜代治, 社会学入門 (第12章, 宗教と芸術), 培風館, 昭和33年.

印南高一, 映画社会学, (早稲田選書) 早稲田大学出版部, 昭和30年.

蔵内数太, 文化社会学 (9, 芸術社会学の問題, 附録(3), 連句の社会学的考察), 培風館, 昭和18年.

——, 文化の諸形態(Ⅱ)ーノンマテリアル・カルチュアについてー, 林恵海・臼井二尚編, 教養講座社会学, 137-154頁, 有斐閣, 昭和28年.

新館正国, 芸術社会学序説, 川合教授還暦祝賀会編, 川合教授還暦記念論文集, 129-193頁, 昭和6年.

貫伝松, 芸術社会学, 時潮社, 昭和29年.

佐原六郎, 塔の研究, 永晃社, 昭和24年.

——, サクソン塔とその社会的背景, 〈哲学〉第38集, 49-78頁, 1960年.

——, 世界の古塔, 雪華社, 昭和38年.

品川清治, 芸術行動, 今日の社会心理学 5, 文化と行動, 培風館, 昭和38年.

——, 日本封建社会の芸術の社会学的考察, 〈ソシオロジ〉第5巻, 第1号, 1956年.

田辺寿利編, 文学と芸術—社会学大系第10巻—(解題, 臼井二尚, 文学と社会, 工藤好美, 文学の交流, 後藤末雄, 芸術と社会, 村田良策, 東洋芸術, 熊谷宣夫, 西洋芸術, 吉川逸治), 石泉社, 昭和29年.

山田宗睦編, コミュニケーションの社会学—福武直・日高六郎監修, 現代社会学講座Ⅳ—(江藤文夫, Ⅳ文化創造, 山田宗睦, Ⅴコミュニケーションの社会的機能), 有斐閣, 昭和38年.

山本正男, 芸術史の哲学, 美術出版社, 昭和37年.

現代芸術の思想—岩波講座現代思想Ⅹ—, 岩波書店, 昭和32年.

講座現代芸術 I-VII, 勁草書房, 昭和33年.

現代の芸術—岩波講座現代10—, 岩波書店, 昭和39年.

芸術理論—講座哲学大系 6—, 弘文堂, 昭和39年.

講座美学新思潮 1-5, 竹内敏雄監修, 勁草書房, 昭和40-41年.

以上の洋書参考文献のうち特に基礎的な文献には※印をつけた.